看護学生との交流による地域リーダー高齢者の若者イメージの変化

渡邊裕子[1)]　森田祐代[1)]　流石ゆり子[1)]　萩原理恵子[1)]
小山尚美[1)]　中澤緑[1)]　水口哲[2)]　森本清[3)]　深沢勝彦[4)]

要　旨

著者らの先行研究「地域リーダー高齢者の若者イメージと若者との交流に対する期待感」の成果を踏まえ，「地域リーダー高齢者が看護学生の授業に看護の対象者役として参加しながら交流する」という企画を実施し，若者イメージと看護学生に感じたことを調査した．地域リーダー高齢者は看護学生が真摯に話しを聴く姿勢に触れ，交流前の「何を考えているかわからない」というイメージが少なくなり，「あたたかさ」や「きちんとしている」というイメージが増加した．同時に目標に向かって学修する看護学生の芯の強さを目の当たりにし，交流の中で人生の先輩として教訓や応援を，積極的且つ自然に伝える姿があった．世代間交流の場として，本企画の有効性と，対象を広く地域在住高齢者に広げて継続的に実施する必要性が示唆された．

キーワード：地域リーダー高齢者　若者イメージ　看護学生　交流事業

Ⅰ　はじめに

少子高齢社会の昨今，家庭や地域社会の中で異世代がかかわり合う機会が減少しており，高齢者と若者の相互理解の促進を目的にした「異世代間交流」が叫ばれている[1)～3)]．Ａ県においても，「生涯学習の理念に立ち，人生80年時代の高齢者に対して，専門的かつ継続的な生涯学習の場を提供し，高齢者の学習ニーズに応えるとともに，高齢者の生きがいづくりを支援し，活力に満ちた地域づくりの指導者養成を目指す」ことを目的に，修業２年間で高齢者が学習する機会を設けている[4)]．その中に異世代間交流を目的とした『若者との交流』講座があり，看護学部の学生と高齢者が一緒に歌やゲームを楽しんだり，高齢者がライフヒストリーを語り人生の先輩として学生に言葉を贈ったりするなど，相互の交流を図ってきた．この事業は，平成18年度にスタートし４年間継続実施している．

高齢者と若者との交流については，主に児童から高校生までを対象とした多くの介入研究[5)～9)]がなされ，看護学生を対象とした「高齢者イメージ」に関連した研究は多くある[10)～18)]．我々も臨地実習や同居祖父母との交流による「高齢者イメージ」を検証してきた．しかし，異世代間交流，特に看護学生との交流が高齢者の若者イメージに及ぼす影響や高齢者の若者イメージの変化が高齢者の生活に及ぼす効果について検証したものはほとんどない．

昨年度著者らは，看護学生との交流が高齢者の若者イメージに及ぼす影響や高齢者の若者イメージの変化が高齢者の生活に及ぼす効果について検証するための第一歩として，「若者との交流事業」に参加した地域リーダー高齢者24

（所　　属）
1）山梨県立大学看護学部　老年看護学領域
2）山梨県中北教育事務所　地域教育支援
3）前山梨県中北教育事務所　地域教育支援
4）元山梨県中北教育事務所　地域教育支援

名を対象に,高齢者が抱いている若者イメージと交流に対する期待感について調査研究を行った[19)～22)]．その結果，高齢者は「世間一般の今どきの20歳代の若者」イメージとして，「話しやすいが何を考えているのかが分からない」と思っている傾向があった.一方,「若者との交流」への期待度は95.8%と高く，分かり合いたい思いがあるが，自分から知恵を伝授するといった意識を持って参加した者は少なかった.

そこで今年度は,高齢者が若者の役に立っているという社会貢献への意識を持って参加できるよう，交流のスタイルを上述内容での個別・集団交流から，高齢者に「看護の対象者役」として専門職をめざす学生の教育の一部に関わる中での交流プログラムに改変した．また,参加する高齢者には「看護学生に先輩としての知恵を伝授する」という役割認識で交流プログラムに臨めるように事前に説明会を開き導入を行った.

今回，改変した「若者との交流事業」の参加前後で，地域リーダー高齢者の若者イメージを比較し，看護学生との交流が高齢者の若者イメージに及ぼす影響について検証し，高齢者の若者に対する役割認識への活性化に向け示唆を得たので報告する.

Ⅱ　用語の定義

本研究では，「地域リーダー高齢者」「看護学生」を以下の定義で用いる.

1. 地域リーダー高齢者

A県が「生涯学習の理念に立ち，人生80年時代の高齢者に対して，専門的かつ継続的な生涯学習の場を提供し，高齢者の学習ニーズに応えるとともに，高齢者の生きがいづくりを支援し，活力に満ちた地域づくりの指導者養成を目指す」を目的に，修業2年間で企画している高齢者のための生涯学習大学校（B学院）に在学している概ね60歳以上の高齢者.

2. 看護学生

4年制大学の看護学部看護学科の学生.

Ⅲ　交流事業の概要

B学院の年間プログラムの中にあるに「若者との交流」事業（以下「交流事業とする」）．地域リーダー高齢者は，看護学生が授業の一環として行う演習に，ボランティアの立場から看護の対象者役（ここでは「高齢患者」）として参加・協力する.

具体的には，参加する高齢者の健康状況は様々であるため，事前に健康に関する簡単な情報（既往歴・現在治療中又は経過観察中の疾患の有無・内服薬を含む具体的な治療・通院はしていないが気になる症状）を，本人の意思に基づいて提供を求める．当日は学生の1グループ（学生4～5名で1グループを編成）に高齢患者役として参加し，学生の質問やバイタルサイン測定などに協力する．学生は対象から事前に提供された情報について看護の視点から情報の意味や他に必要な情報などについて考えた上で演習に臨み，実際に高齢者と接する中でさらに情報を深め，ヘルスアセスメントを行う．演習時間は約2時間とし，演習終了後に高齢者と学生が自由に意見交換のできる時間（20分程度）を設け，高齢者から人生の先輩として，専門職をめざす看護学生にアドバイスを行うことで，高齢者と学生が相互に理解を深められるような設定とする.

Ⅳ　研究目的

看護学生との交流事業による地域リーダー高齢者の若者イメージの変化を明らかにする.

Ⅴ　研究方法

1. 研究デザイン

調査研究（自記式質問紙法）

2. 調査対象

「活力に満ちた地域づくりの指導者養成を目指す」ことを目的とした高齢者のための生涯学習大学校（修業2年間）の2年生で，看護学生との交流事業に今回初めて参加した38名.

3. 調査日

平成22年6月

4. 調査方法

平成22年6月の交流事業開始直前に，交流の企画・運営に関係しない共同研究者が研究の概要を文書と口頭で説明後，研究に同意が得られた協力者（以下 調査対象者）に調査票を一斉配付し，「交流事業」前の調査票はその場で回収．「交流事業」後の調査票は2週間以内に郵送にて回収した．なお,前後比較を行うため,同一番号を付した調査票をセットにし,個人が特定されないために受付番号と一致しないよう,ランダムに配付した.

5. 調査内容

1） 基本属性

年齢，性，若者と話す機会（「交流事業」前のみ）

2） 若者イメージ

甲斐らが「看護学生が高齢者の自宅を訪問し経験談を聞かせていただく」という介入研究の前調査に用いた「若者イメージ尺度[10]」を参考にした「20歳代の若者は〇〇」という設問で,具体的には「社会に貢献している」,「親や周囲に甘やかされている」,「これからの活躍が期待できる」,「何を考えているのかわからない」,「話しやすい」,「きちんとしている」,「あたたかい」,「強い」の8項目．8項目それぞれに対し,「非常にそう思う」～「全くそう思わない」の5段階で回答する(「交流事業」前・後)．この「若者イメージ尺度」は，高齢者の若者イメージに関連する先駆的研究で使用されており，看護学生との交流前に調査している点でも本研究と共通することから参考にした.

6. 分析方法

調査内容の各項目について単純集計を行った後，基本属性（性別，年齢，若者と話す機会と頻度）を独立変数，若者イメージを従属変数としクロス集計を行ない，χ^2検定により比較した．若者イメージは,「非常にそう思う」と「ややそう思う」を「思う」,「あまり思わない」と「全く思わない」を「思わない」とした．なお，統計処理にはSPSS16.0J for Windowsを用いた.

7. 倫理的配慮

対象者に本研究の目的・調査内容・調査方法・研究結果の公表・協力の任意性・研究協力を拒否しても不利益は一切生じないこと・同意は撤回できること・「交流事業」の前後で比較を行うため,同一番号を付した調査票を配付するが,データは匿名化され研究目的にのみ使用する旨について記載した文書を用いて口頭で十分な説明を行い，調査票の冒頭には「協力する」「協力しない」の選択肢を付し自由意思を尊重した.

なお，本研究は山梨県立大学看護学部研究倫理審査委員会の審査にて,『承認』を得ている.

Ⅵ 結果

対象者38名全員から回答が得られ（回収率100%），その内有効回答が得られた35名(92.1%）を分析対象とした.

1. 基本属性

1） 年齢・性別

対象者の平均年齢は67.7±3.3歳で，男性10名（28.6%），女性25名（71.4%）．男女別の平均年齢は，男性70.4±3.7歳，女性66.7±2.5歳であった.

2） 若者と話す機会

「18～30歳以下の若者と話をする機会があるか」の問に,「ある」が9名（25.7%),「ときどきある」が12名（34.3%),「ほとんどない」14名（40.0%）であった（図1).

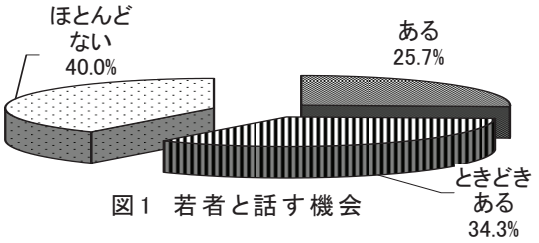

図1 若者と話す機会

「ある」又は「ときどきある」と答えた21名の話す頻度は，「週1回程度」が9名（42.9%）で最も多く，次いで「月1回程度」が5名（23.8%）で,「毎日」は1名（4.8%）であった．また，どれくらいの時間話すかでは，「30分以内」が10名（47.6%）で最も多く，次いで「挨拶程度」が5名（23.8%）で，「1時間以上」は3名（14.3%）であった．

2. 地域リーダー高齢者の若者イメージ

若者イメージ8項目の「交流事業」前（図2・表1）と「交流事業」後（図3・表2）の回答は図・表に示すとおりであった．

「交流事業」前に「思う」は，「これからの活

表1:「交流事業」前の地域リーダー高齢者の若者イメージ　(n=35)

	非常にそう思う		ややそう思う		どちらとも言えない		あまり思わない		全く思わない	
社会に貢献している	2	5.7%	11	31.4%	11	31.4%	11	31.4%	0	0.0%
親や周囲に甘やかされている	6	17.1%	17	48.6%	5	14.3%	6	17.1%	1	2.9%
これからの活躍期待できる	15	42.9%	11	31.4%	7	20.0%	2	5.7%	0	0.0%
何を考えているかわからない	0	0.0%	15	42.9%	20	57.1%	0	0.0%	0	0.0%
話しやすい	3	8.6%	7	20.0%	17	48.6%	8	22.9%	0	0.0%
きちんとしている	0	0.0%	4	11.4%	27	77.1%	4	11.4%	0	0.0%
あたたかい	0	0.0%	8	22.9%	24	68.6%	3	8.6%	0	0.0%
強い	1	2.9%	4	11.4%	19	54.3%	10	28.6%	1	2.9%

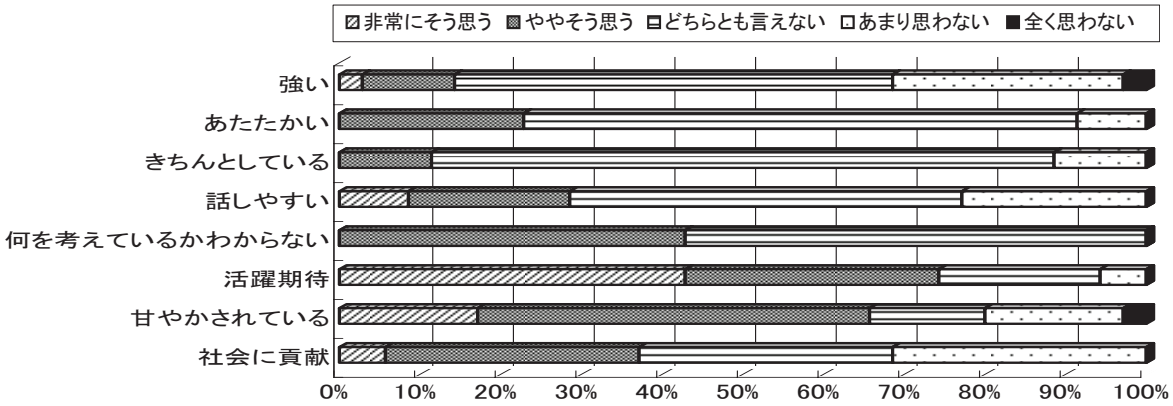

図2「交流事業」前の地域リーダー高齢者の若者イメージ

表2:「交流事業」後の地域リーダー高齢者の若者イメージ　(n=35)

	非常にそう思う		ややそう思う		どちらとも言えない		あまり思わない		全く思わない	
社会に貢献している	5	14.3%	12	34.3%	15	42.9%	3	8.6%	0	0.0%
親や周囲に甘やかされている	4	11.4%	20	57.1%	7	20.0%	4	11.4%	0	0.0%
これからの活躍期待できる	18	51.4%	14	40.0%	2	5.7%	1	2.9%	0	0.0%
何を考えているかわからない	0	0.0%	11	31.4%	15	42.9%	7	20.0%	2	5.7%
話しやすい	5	14.3%	15	42.9%	11	31.4%	4	11.4%	0	0.0%
きちんとしている	4	11.4%	18	51.4%	10	28.6%	3	8.6%	0	0.0%
あたたかい	4	11.4%	18	51.4%	10	28.6%	2	5.7%	1	2.9%
強い	0	0.0%	14	40.0%	17	48.6%	2	5.7%	2	5.7%

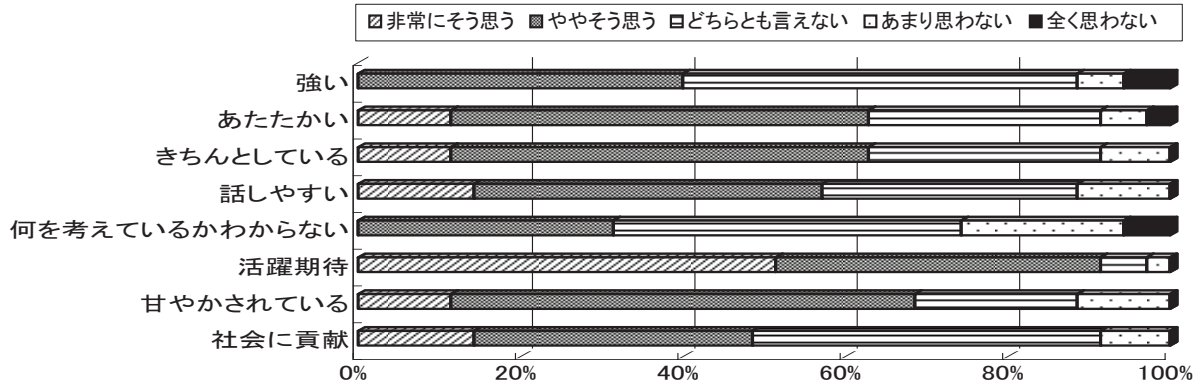

図3「交流事業」後の地域リーダー高齢者の若者イメージ

躍が期待できる」が26名（74.3%）で最も多く，次いで「親や周囲に甘やかされている」が23名（65.7%),「何を考えているかわからない」が15名（42.9%）の順であった．また，「思わない」は,「社会に貢献している」11名（31.4%),「話しやすい」8名（22.9%）の順で多かった．

次に「交流事業」後では,「思う」は「交流事業」前と同様に「これからの活躍が期待できる」が32名（91.4%),「親や周囲に甘やかされている」が24名（68.6%）の順で多く，次いで「きちんとしている」「あたたかい」が各22名（62.9%）であった．また，「思わない」は「何を考えているのかわからない」が9名（25.7%）で最も多かった．

交流の前後を比較すると「きちんとしている（p=0.00004)」,「あたたかい（p=0.0021)」,「何を考えているのかわからない（p=0.0057)」,「強い（p=0.0219)」の4項目で有意な差がみられた（表3・図4）．

表3：地域リーダー高齢者の若者イメージの変化（「交流事業」前後の比較） （n=35）

項目	思う				どちらとも言えない				思わない				有意確率	
	前		後		前		後		前		後		*p≦0.05 **p≦0.01	
社会に貢献している	13	37.1%	17	48.6%	11	31.4%	15	42.9%	11	31.4%	3	8.6%		0.0573
親や周囲に甘やかされている	23	65.7%	24	68.6%	5	14.3%	7	20.0%	7	20.0%	4	11.4%		0.5563
これからの活躍期待できる	26	74.3%	32	91.4%	7	20.0%	2	5.7%	2	5.7%	1	2.9%		0.2367
何を考えているかわからない	15	42.9%	11	31.4%	20	57.1%	15	42.9%	0	0.0%	9	25.7%	**	0.0057
話しやすい	10	28.6%	20	57.1%	17	48.6%	11	31.4%	8	22.9%	4	11.4%		0.0510
きちんとしている	4	11.4%	22	62.9%	27	77.1%	10	28.6%	4	11.4%	3	8.6%	**	0.00004
あたたかい	8	22.9%	22	62.9%	24	68.6%	10	28.6%	3	8.6%	3	8.6%	**	0.0021
強い	5	14.3%	14	40.0%	19	54.3%	17	48.6%	11	31.4%	4	11.4%	*	0.0219

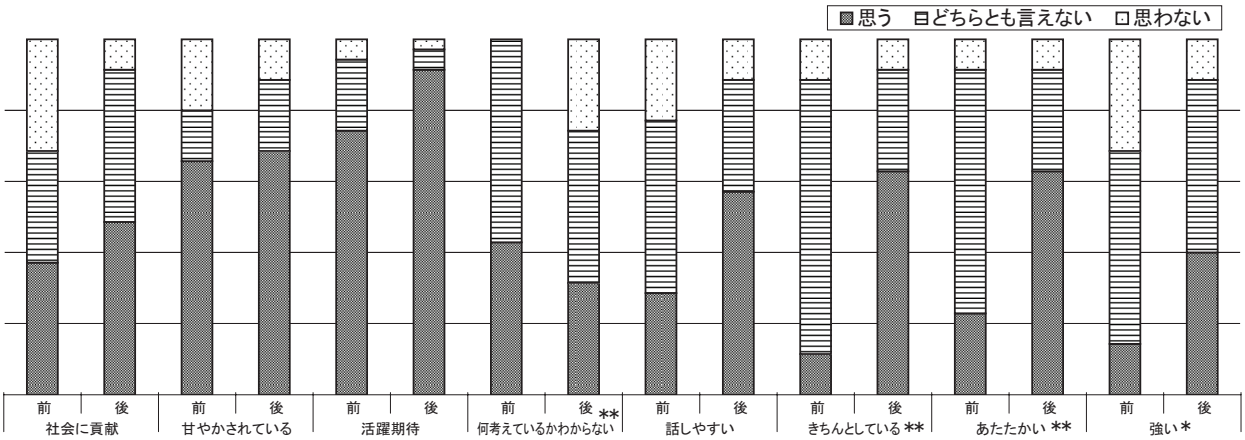

図4 若者イメージの変化（「交流事業」前後の比較） *p≦0.05 **p≦0.01

項目別にみると,「きちんとしている」は,「交流事業」前は「どちらとも言えない」が27名（77.1%）で最も多かったのに対し,「交流事業」後は「思う」が22名（62.9%）で最も多かった．「あたたかい」も同様に，「交流事業」前は「どちらとも言えない」が24名（68.6%）で最も多かったのに対し，「交流事業」後は「思う」が22名（62.9%）で最も多かった．一方，「何を考えているのかわからない」の「交流事業」前後の変化は「思う」が15名（42.9%）から11名（31.4%）に，「どちらとも言えない」が20名（57.1%）から15名（42.9%）に減少し,「思わない」が0から9名（25.7%）に増加していた．また「強い」では,「思わない」が11名（31.4%）から4名（11.4%）に，「どちらとも言えない」が19名（54.3%）から17名（48.6%）に減少し,「思う」が5名（14.3%）から14名（40.0%）に増加した．

イメージの変化を男女別にみると，男性では交流の前後で各項目に大きな差がなかったのに対し，女性では「きちんとしている（p=0.00002)」,「あたたかい（p=0.0011)」,「何を考えているのかわからない（p=0.0067)」,「強い（p=0.0151)」,「話しやすい（p=0.0349)」

の５項目で有意な差がみられた．

女性だけに有意差のあった「話やすい」では，「思わない」が６名（24.0％）から２名（8.0％）に，「どちらとも言えない」が11名（44.0％）から６名（24.0％）に減少し，「思う」が８名（32.0％）から17名（68.0％）に増加した（表4）．

表4：地域リーダー高齢者の若者イメージの変化（「交流事業」前後の比較-男女差）　（n=35）

項目	性別	思う				どちらとも言えない				思わない				有意確率	
		前		後		前		後		前		後		*p≦0.05 **p≦0.01	
社会に貢献している	男性	3	30.0%	4	40.0%	4	40.0%	5	50.0%	3	30.0%	1	10.0%		0.5342
	女性	10	40.0%	13	52.0%	7	28.0%	10	40.0%	8	32.0%	2	8.0%		0.1043
親や周囲に甘やかされている	男性	9	90.0%	7	70.0%	0	0.0%	1	10.0%	1	10.0%	2	20.0%		0.4531
	女性	14	56.0%	17	68.0%	5	20.0%	6	24.0%	6	24.0%	2	8.0%		0.3040
これからの活躍が期待できる	男性	7	70.0%	8	80.0%	2	20.0%	1	10.0%	1	10.0%	1	10.0%		0.8187
	女性	19	76.0%	24	96.0%	5	20.0%	1	4.0%	1	4.0%	0	0.0%		0.1195
何を考えているかわからない	男性	5	50.0%	6	60.0%	5	50.0%	3	30.0%	0	0.0%	1	10.0%		0.4514
	女性	10	40.0%	5	20.0%	15	60.0%	12	48.0%	0	0.0%	8	32.0%	**	0.0067
話しやすい	男性	2	20.0%	3	30.0%	6	60.0%	5	50.0%	2	20.0%	2	20.0%		0.8646
	女性	8	32.0%	17	68.0%	11	44.0%	6	24.0%	6	24.0%	2	8.0%	*	0.0349
きちんとしている	男性	2	20.0%	4	40.0%	6	60.0%	4	40.0%	2	20.0%	2	20.0%		0.5866
	女性	2	8.0%	18	72.0%	21	84.0%	6	24.0%	2	8.0%	1	4.0%	**	0.00002
あたたかい	男性	3	30.0%	4	40.0%	6	60.0%	4	40.0%	1	10.0%	2	20.0%		0.6453
	女性	5	20.0%	18	72.0%	18	72.0%	6	24.0%	2	8.0%	1	4.0%	**	0.0011
強い	男性	2	20.0%	3	30.0%	7	70.0%	6	60.0%	1	10.0%	1	10.0%		0.8707
	女性	3	12.0%	11	44.0%	12	48.0%	11	44.0%	10	40.0%	3	12.0%	*	0.0151

Ⅶ　考察

若者イメージ８項目について尋ねた結果，「交流事業」前・後共に，「これからの活躍が期待できる」が最も多かった．これは，前回調査とも一致する結果であったが，今回は「交流事業」前の74.3％から「交流事業」後は91.4％と，17.1ポイント上昇している．また，「交流事業」前には「社会に貢献しているとは思わない」が「交流事業」前の31.4％から「交流事業」後は8.6％と22.8ポイント減少している．筆者らの先行研究[21]で，高齢者が「交流事業」後に学生に抱く印象として，【前向きな姿勢】【真面目で真剣】【目的意識がある】【自分の考えを持っている】【看護への熱い思いがある】【未来への期待】【頼もしい】等が挙げられていた．目的意識を持って学習し社会に貢献することを志す看護学生の姿に接し，若者に対する期待をさらに大きくしたこともうかがわれる．

一方，「親や周囲に甘やかされている」は，「思う」が「交流事業」前65.7％から「交流事業」後には68.6％に上昇し，前後とも高い割合を占めていた．「親や周囲に甘やかされている」というイメージは現代社会の特徴であるとも言え，今回の交流だけで払拭できるものではない．しかし昨年度実施した先行研究[22]では，「親や周囲に甘やかされている」が「交流事業」後，肯定的に変化している割合が高かった．今回は「高齢患者役」としての参加であったため，若者の生活について理解を深める時間を十分取ることが難しかったことが影響していると考えられる．交流の中に，学生が親や周囲に対して感じていることを話したり，自立して生活している学生の状況を知る機会があったりすると，高齢者の若者に対するイメージの変化が期待できる．今後「交流事業」を企画していく上での課題であると考える．

次に，「交流事業」前・後で有意な差があった「きちんとしている」，「あたたかい」，「何を考えているのかわからない」，「強い」についてみてみる．「きちんとしている」と「あたたかい」は，いずれも「交流事業」前に「わからない」という回答が多かった項目である．また，「何を考えているのかわからない」は「思う」が42.9％から31.4％に11.5ポイント，「どちらとも言えない」が57.1％から42.9％に14.2ポイント減少し，「思わない」が0から25.7％に増加している．今回，前年度の研究成果を踏まえ，「高齢者が看護学生の授業に看護の対象者役として参加しながら交流する」という企画を実施

したが，看護学生が真摯に話しを聴く姿勢に触れ,「交流事業」前の「若者の考えのわかり難さ」に対するイメージがなくなり，あたたかさや誠実さを感じることができたため，大きなイメージの変化に繋がったと推察される.

また「強い」は,「思わない」が31.4％から11.4％に20ポイント,「どちらとも言えない」が54.3％から48.6％に5.7ポイント減少し,「思う」が14.3％から40.0％に25.7ポイント増加している．先にも述べたとおり，目標に向かって学習する看護学生の芯の強さを目の当たりにし,イメージが変化したのではないかと考える.

先行研究[21]では,「交流事業」終了後調査票の自由記述欄に,高齢者から「今から看護を背負っていく若者に,日本の将来を担う自信を植え付けてもらいたい」「看護師になる勉強だけでなく,人間としての成長を学ぶことが必要」等の貴重なメッセージをもらった．そこで今回は，人生の先輩として高齢者から専門職をめざす看護学生に直接アドバイスをもらう時間を設定した.学生に向けたメッセージには,地域リーダー高齢者が一生懸命学んでいる看護学生を理解しながら，期待を込めて年長者としての知恵を伝授する意識が現れており，交流の中で人生の先輩として教訓や応援を，積極的且つ自然に伝える姿があった.

本研究の対象者は平均年齢が67.7 ± 3.3歳と前期高齢者がほとんどであったが,「若者と話す機会はほとんどない」が40%と多かった.また「話す機会がある」と答えた人でも，話す時間は「挨拶程度」～「30分以内」で71.4%を占めており，お互いを深く理解できるような会話にはなっていないことが推察される.一方,先行研究[20]でも述べたが，医療場面では高齢者が看護の対象となる場面がますます多くなっており，高齢患者やその家族のニーズに応じた看護提供が求められている．しかし，日常の中で高齢者との接触体験が少ない看護学生にとって，高齢者の理解や高齢者との対応に困難を要する場合もある．また，身体面の老化や活動性の低下などのイメージが先行し，高齢者の持っている能力に気づかないことも多く，看護基礎教育において，学生が高齢者への関心と理解を深められるような教育を実践していくことが求められる．本交流のように，地域の中で生き生きと生活している高齢者と直接交流できることは，看護学生が高齢者の理解を深める絶好の機会となる．以上のことから，本交流は世代間交流の場として，高齢者と現代の若者である看護学生，相互にとって貴重な機会であり，対象を地域在住高齢者に広げて継続的に実施することで，さらに有効な企画になると考える.

Ⅷ　結論

先行研究成果を踏まえ,「地域リーダー高齢者が看護学生の授業に看護の対象者役として参加しながら交流する」という企画を実施し，若者イメージと看護学生に感じたことを調査した．看護学生が真摯に話しを聴く姿勢に触れ,「交流事業」前の「若者の考えのわかり難さ」に対するイメージがなくなり，あたたかさや誠実さを感じていた．同時に目標に向かって学修する看護学生の芯の強さを目の当たりにし，交流の中で人生の先輩として教訓や応援を，積極的且つ自然に伝える姿があった．世代間交流の場として，本企画の有効性と，対象を広く地域在住高齢者に広げて継続的に実施する必要性が示唆された.

Ⅸ　おわりに

今回，地域リーダー高齢者と看護学生との交流スタイルを変更し，高齢者の若者イメージが大きく変化した．しかし今回の対象者は，地域リーダー高齢者の集団であり，単発の交流であったことから，その結果には限界がある.

今後は，看護学生との交流が対象者の若者イメージに及ぼす影響や若者イメージの変化が生活に及ぼす効果について検証していくが，この結果を踏まえ，大学の周辺地域に在住している一般高齢者に対象を広げて，交流のプログラムをさらに充実させながら調査・介入を続けていきたいと考える.

謝　辞

本研究の実施にあたり，快く調査にご協力くださいました皆様に深く感謝申しあげます.

なお，本研究は平成22年度山梨県立大学地域研究交流センター共同研究費の助成を受け実施した研究の一部である.

【文献】

1) 草野篤子：インタージェネレーションの必要性，現代のエスプリNo.444，至文堂，2004.
2) 柴田博・長田久雄：老いのこころを知る，ぎょうせい，2003.
3) 谷口幸一・佐藤眞一：エイジングの心理学 老いについての理解と支援，北大路書房，2009.
4) 山梨ことぶき勧学院，山梨県ホームページ，http://www.pref.yamanashi.jp/shakaikyo/38948246326.html（2010.9.1閲覧）.
5) 大津廣子・足立みゆき・渡邊亜紀子：前期高齢者と後期高齢者が求める看護師像の違い，日本看護科学学会学術集会講演集Vol.27，287，2007.11.
6) 新田淳子・緒方泰子：世代間交流プログラムに長期間参加した小学生の高齢者観　介護老人福祉施設との継続的な交流のもたらす意義，日本看護福祉学会誌Vol.10 No.1，90-91，2004.
7) 渡辺直紀・藤原佳典・西真理子他：都市部高齢者の世代間交流型社会貢献　プログラム"REPRINTS"(4)　児童の高齢者イメージ，老年社会科学Vol.27 No.2，273，2005.
8) 藤原佳典・西真理子・渡辺直紀他：都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム　"REPRINTS"の1年間の歩みと短期的効果，日本 公衆衛生雑誌Vol.53 No.9，702-714，2006.
9) 岩佐一・権藤恭之・増井幸恵他：地域在宅超高齢者における廃用症候群の予防を目指した訪問型介入プログラム「自分史くらぶ」の開発予備的検討，老年社会科学Vol.29 No.1，75-83，2007.
10) 甲斐一郎：ソーシャル・サポート授受の介入研究（世代間交流が高齢者と高校生に与える影響）（研究課題番号10670338）,平成10～12年度科学研究費補助金基盤研究（C）(2)研究成果報告書，資料44-5，2002.
11) 流石ゆり子・亀山直子：『健康高齢者実習』の意義－学生の実習終了後レポートの分析による学習内容の検討－，日本老年看護学会誌 Vol.9 No.1，65-75，2004.
12) 渡邊裕子・倉田トシ子・森田祐代：同居祖父母の違いによる看護学生の高齢者イメージ，日本看護科学学会学術集会講演集Vol.24，322，2004.12.
13) 家里かおり・渡邊裕子・倉田トシ子他：同居祖父母の健康状態が看護学生の高齢者イメージに及ぼす影響，日本看護学会論文集 老年看護Vol.35，82-84，2005.
14) 渡邊裕子・倉田トシ子・森田祐代：看護学生の高齢者イメージに関する研究－老年看護学講義開始前から老年看護学臨地実習Ⅱ終了までの変化－，山梨県立看護大学短期大学部紀要 Vol.11 No.1，159，2006.
15) 勝眞久美子：自律した高齢者との語り合いが看護学生にもたらす効果，日本看護学会論文集 老年看護Vol.37，172-174，2007.
16) 藤巻尚美・流石ゆり子・牛田貴子：『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた学習効果-高齢者に対する年齢と色のイメージ変化より-，山梨県立大学看護学部紀要Vol.9，35-42，2007.
17) 藤巻尚美・流石ゆり子・牛田貴子：『健康高齢者実習』プログラムに高齢者疑似体験を組み入れた学習効果（第2報）-高齢者の活動性・自立性のイメージに焦点をあてて-，山梨県立大学看護学部紀要Vol.10，93-101，2008.
18) 仲谷明子・松岡佳子・高田由起子：患者と看護師が求める看護師像の相違，日本看護学会抄録集 看護管理Vol.39，351，2008.10.
19) 渡邊裕子・小山尚美・流石ゆり子他：看護学生との交流による地域リーダー高齢者の活動への満足度・心理・若者イメージの変化－「交流事業」参加前後の比較から－,平成21年度山梨県立大学看護学部共同研究費助成研究成果報告書,2010.
20) 渡邊裕子・小山尚美・流石ゆり子他：地域リーダー高齢者の若者イメージと若者との交流に対する期待感,山梨県立大学看護学部紀要,Vol.12,9-18,2010.
21) 萩原理恵子・中澤緑・小山尚美他：地域リーダー高齢者が若者に対して抱く印象-『看護学生との交流事業』後の調査から-，日本看護学会抄録集 老年 看護 2010，187，2010.9.
22) 小山尚美・渡邊裕子・流石ゆり子他：地域リーダー高齢者が抱く若者イメージの変化『看護学生との交流事業』前後での比較，日本老年看護学会第15回学術集会抄録集，234，2010.11.

Changing Young People Image of Senior Leaders with Nursing Student Exchange Programs

WATANABE Yuko, MORITA Sachiyo, SASUGA Yuriko,
HAGIHARA Rieko, KOYAMA Takami, NAKAZAWA Midori,
MIZUGUCHI Tetsu, MORIMOTO Kiyoshi, FUKASAWA Katuhiko

key words: senior leaders, young people image, nursing student, exchange programs